7月　営農インフォメーション

水稲　生育量や葉色に合わせて穂肥の施用をしましょう。病害虫の発生に注意しましょう。

大豆　中耕・培土は開花期までに実施しましょう。

水稲

①穂肥

7月に入ると稲の生育ステージは、体をつくる「栄養生長期」から穂や籾をつくる「生殖生長期」に移ります。穂肥の施用は、穂数を確保し分化した籾や枝梗の退化を防ぎ、1穂中の粒数を確保するための重要な作業です。

穂肥は、穂となる幼穂長を確認して施用しますが、適期に必要量を確実に施用することが大切なポイントです。

※近年は、高温の影響で幼穂形成期が早まる傾向があるため、よく観察しておきましょう。

●幼穂の確認方法

①畦畔から5m以上田んぼに入り、平均的な株を選びます。その中で、草丈が最も長い茎を根元より引き抜きます。

②カッターナイフなどで茎を縦に半分に切り、白い幼穂長を確認しましょう。

（写真1幼穂の確認方法参照）

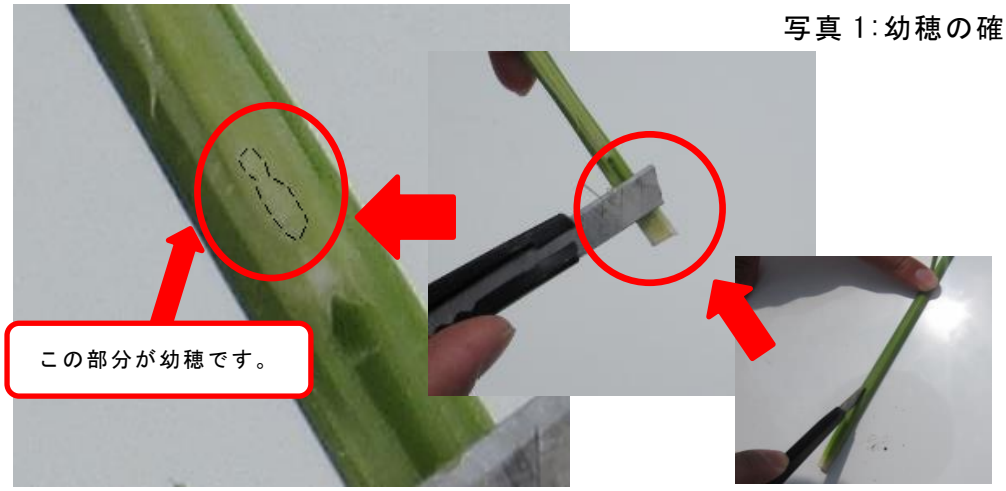


写真1:幼穂の確認方法

【施肥設計基準表】

JA東びわこ環境こだわり米　(kg/10a)

肥料	省力型(1回のみ施用)	
	滋賀こだわり穂肥ハーフコート306	
施用時期	幼穂1～2mm（出穂25日前）	幼穂5～10mm（出穂18日前）
コシヒカリ	—	30kg
秋の詩	30kg	—
みずかがみ	25kg	—

※詳しくは水稲施肥設計書をご確認ください。

【穂肥施用時期】

品種	1回目	2回目
コシヒカリ 滋賀羽二重糯	幼穂長5～10mm （出穂18日前）	1回目の施用より約1週間後 （出穂10日前）
キヌヒカリ 日本晴 秋の詩	幼穂長1～2mm （出穂25日前）	幼穂長5～10mm （出穂18日前）

※葉色が基準よりも濃い場合は表の時期よりも施用を遅らせたり、施用量を控える必要があります。また、葉色が薄い場合は、穂肥の施用を早める必要があります。
※基肥一発肥料を基準量施用の場合は、基本的に穂肥の施用は必要ありません。
※詳しくは水稲施肥設計書をご確認ください。

③水管理

出穂3週間前後はカドミウムの吸収が盛んになります。カドミウムは、湛水状態を保つことで吸収を抑制することができるため、湛水管理を行いましょう。但し、夏場は水温が高くなり稲の活力低下につながる事から浅水管理ならびに定期的に入水して水温を下げて下さい。

●　ＪＡ東びわこ米

品種	商品名	出穂 25 日前	出穂 18 日前	出穂 10 日前
コシヒカリ	化学肥料 20-0-10	—	13 kg	13 kg
	穂肥まかせな彩	—	22kg	—
キヌヒカリ 日本晴 秋の詩	化学肥料 20-0-10	13 kg	13 kg	—
	穂肥まかせな彩	25 kg	—	—

台風対策について

台風が接近すると、強風により急激に水分が奪われ生育に影響をおよぼす可能性があるため、できるだけ深水で管理し、台風に備えましょう。

③病害虫防除

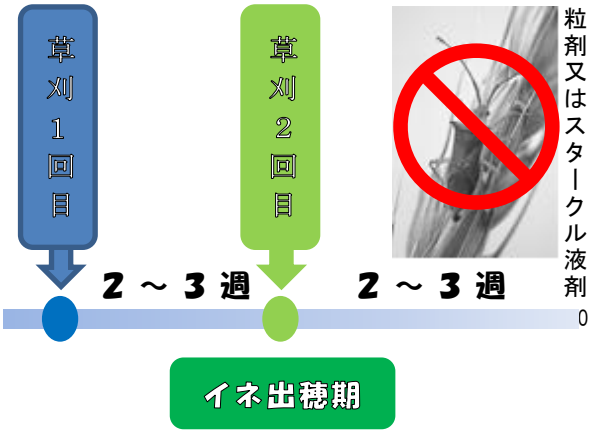
●いもち病●ジメジメとした湿気の多い気象が続くと発生が増加します。（栽植密度の高いほ場でも発生します）いもち病の発生が例年多い地域については十分注意しましょう。※参考農薬：コラトップ粒剤5

写真２
葉いもち

●紋枯病（もんがれ）●葉鞘に褐色の楕円状の斑紋が現れ、場合によっては葉身にまで進展します。近年、紋枯病の発病が影響した登熟障害や倒伏を助長したと思われるほ場が多いため、よくほ場を観察して、早期発見と早期防除に努めましょう。※参考農薬：リンバー粒剤

写真３
紋枯病

●斑点米カメムシ類●カメムシ類はイネ科雑草が生い茂った畦畔に侵入・繁殖し、稲の出穂とともに水田へ侵入します。カメムシ類の被害を防ぐためには、出穂２～３週間前と出穂期の２回に畦畔草刈りを実施し、イネ科雑草を除草しましょう。地域で共同の薬剤防除を行うと効果的ですので必ず実施しましょう。※参考農薬：スタークル粒剤又はスタークル液剤0



出穂前後計６週間はカメムシ類を寄せ付けない！

大豆

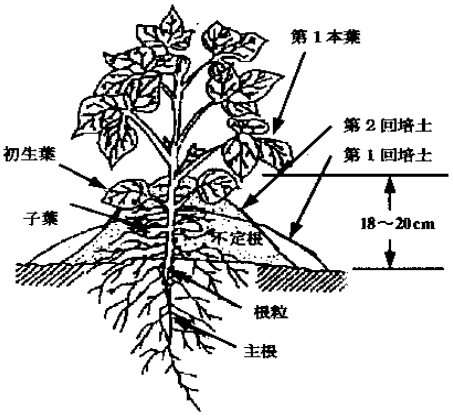
〇中耕・培土

中耕・培土は大豆の安定多収栽培には、欠かすことのできない基本技術です。

【効果】

雑草防除・倒伏軽減・排水性の向上・養分吸収の向上・根粒菌の増殖など

●１回目は、本葉２～３葉期頃に子葉が隠れる程度に行いましょう。●２回目は本葉４葉期頃に初生葉が隠れる程度の高さ（１８～２０cm）まで行いましょう。作業適期が遅れると根を傷めるので、開花１週間前までには終わらせましょう。



大豆の中耕・培土

〇本田雑草生育期の除草

中耕培土後に雑草が多発した場合は、ポルトフロアブルや大豆バサグラン液剤を使用しましょう。使用前には、使用時期や散布量、注意事項をよく確認してから使用しましょう。

※ポルトフロアブルはイネ科雑草に高い効果があります。使用時は周辺の水稲に注意しましょう。

※大豆バサグラン液剤はイネ科雑草には効果がありません。